

第6回ふるさと検定上級試験問題 回答及び解説

1 郷土料理の一つである「ズイキの酢の物」は、()とも呼ばれ、食物繊維が豊富であり、便秘に効果的だといわれている。

- ①スベ ②スコ ③コト ④キト

正解は②です。(正解率89.5%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』31頁

郷土料理の一つ「ずいきの酢のもの」は、スコとも呼ばれています。ずいきとは、里芋の芽が出て成長し茎になった部分のことで、特に福井県から石川県南部では、八ツ頭芋の茎を材料とした赤ズイキの「スコ料理」が昔から各家庭でつくられました。

2 加賀の農家には()と呼ばれる物置が屋根裏にあり、燃料などを保存した。

- ①座敷 ②納戸 ③つし ④納屋

正解は③です。(正解率 57.9%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』 頁

農家の屋根は藁葺きで、玄関を入るとオエと呼ばれる広い居間がありました。そのオエの天井裏は「ツシ」と呼ばれ、煙出しの物置になっていました。この天井裏は囲炉裏の煙などで常に乾燥していたので、たき付け用の小枝(ほえ)やばいたなどを保管する物置にも使われました。

3 天然記念物の鹿島の森は、石川県に所属し、アカテガニや()などの珍しい動物が生息している。

- ①ノミハマグリ ②ツルガマイマイ ③ヤマトシジミ ④カバサクラガイ

正解は②です。(正解率36.8%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』44頁

鹿島の森は、加賀市塩屋町の大聖寺川河口にあり、南西側は福井県の北潟湖に臨む陸地続きの小島です。総面積は約3haで楕円形の樹叢です。タブ・スダジイ・ヤブニッケイなどの常緑広葉樹林が覆い、樹下にはカラタチバナ・ベニシダ・ムラサキシキブなどが自生し、動物ではツルガマイマイ・アカテガニなどが生息しています。

4 もともと食用として外国から入り、育てられていた()は、時代の変化により野生動物になっている。

- ①トノサマガエル ②アカガエル ③ウシガエル ④ヒキガエル

正解は③です。(正解率 78.9%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』15頁

外来種の動物で、日本にもたらされて野生化したものがいくつもあります。アライグマ、ハクビシン、ミシシippアカミミガメ、魚類ではオオクチバスやブルーギルはその代表です。ウシガエルも、食用として輸入したことをきっかけに、その一部が放逐され、全国各地に定着した生き物です。

5 東谷地区に所属する集落で、大聖寺川上流にあるのは()町である。

- ①杉水 ②大土 ③今立 ④真砂

正解は①です。(正解率 15.8%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』11頁

山中温泉の東谷地区の大土、今立、荒谷、杉水の4集落は独特な山村環境が色濃く残されており、国の重要伝統的建造物群保存地区となっています。これらの集落は動橋川上流域に位置し、同じ経済・文化圏に含まれていますが、杉水町だけは、大聖寺川上流域に位置しています。

- 6 加賀市の（ ）町では、およそ 1000 万年前より新しい火山灰が固まってできた加佐ノ岬砂岩層の砂岩が多く産出され、主に土手の内張り石積みや建築土台等に使われた。
- ①深田 ②勅使 ③黒瀬 ④南郷

正解は①です。（正解率 57.9%） 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』12 頁

橋立丘陵の砂層の下は岩盤で、加佐の岬砂岩層と呼ばれています。この砂岩は、元火山灰が固まったもので、別名、深田石と呼ばれ、主に建築材料に使われてきました。柔らかくもろいので、冬期には霜崩れにあい、そのため石垣の内張や基礎石の下に敷き詰めたりしました。

- 7 氷河期が終わった今から一万年前、（ ）に対馬海流が流れ込むようになり、その結果、日本列島の西側海岸は雪が多量に降るようになった。
- ①日本海 ②東シナ海 ③オホーツク海 ④南シナ海

正解は①です。（正解率 73.7%） 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』13 頁

日本海側が多雪になったのは、日本海に対馬海流が流れ込んできた約1万年前からだといわれています。シベリアや中国大陸からの乾燥した冷たい季節風が日本列島に向かって吹き込むと、その風が対馬暖流の影響を受けて、大量の水蒸気が発生します。その風が高い山にあたって雪雲をつくり大量の雪を日本海側に降らせると考えられています。

- 8 片野鴨池など、加賀市の湖沼には（ ）が生えている。これらは川から海に流出し、砂浜に打ち上げられる。
- ①ヒメビシ ②れんこん ③水蓮 ④花菖蒲

正解は①です。（正解率 73.7%） 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』17 頁

加賀市の湖沼やため池には多くの水生植物が生えていますが、水草は雨が降ると増水して川や海に流れていきます。日本海に流れ出したヒメビシも、その1つで最後は砂浜に打ち上げられます。ヒメビシは、中国や台湾、朝鮮半島に多く生息しているヒシ科の水草ですが、近年、日本ではその多くが消滅し、現在、絶滅危惧種に指定されています。

- 9 江戸時代はとめ山となり、人々の入山が規制されていた錦城山は、自然の木々や草が生い茂り、（ ）などのねぐらとなっており、糞害が著しい。
- ①鴨 ②サギ ③鷹 ④キジ

正解は②です。（正解率 78.9%） 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』14 頁

錦城山の北西斜面は、俗に「サギ山」とも呼ばれ、数百羽のサギたちがコロニー（集団繁殖地）を形成しています。毎年、4から5月頃には、巣作りのために小枝をくわえて飛び交い、巣作りをする姿も見かけます。錦城山にはアオサギ、アマサギ、ダイサギ、チョウサギなどの種類があり、周辺への糞害も目立っています。

- 10 もと大聖寺藩士（ ）は、旧名を一色一之助といい、維新後、米国で万国博覧会を視察するなど新知見を得て、九谷焼の振興や鉛筆会社を興すなど、殖産興業に務めた。
- ①西出大三 ②下口宗美 ③飛鳥井清 ④畑久治

正解は③です。（正解率 94.7%） 『学習帳産業人物編』22 頁

加賀市には、明治の近代化に貢献した人が何人もいます。もと大聖寺藩士の飛鳥井清もそのひとりで、維新後、大蔵省の職員を経て、米国の万国博覧会を見学するなど新知見を得て、九谷焼や山中漆器の振興や加州松島社と称する鉛筆会社を興すなど、郷土の殖産興業に多大な貢献をしました。

11 橋立町出身の哲学者で京都帝大の教授を務めた（ ）は、教育哲学の体系化を行ない、特に長野県の信濃教育会では高く評価された。
①木村有香 ②関 秀華 ③松岡 信 ④木村素衛

正解は④です。（正解率 73.7%） 『学習帳産業人物編』 31 頁

苦学をしながら、京都帝大に学んだ木村素衛は、西田幾多郎の哲学やフィヒテを中心としたドイツ観念論を研究し、教育哲学の体系化を行ないました。戦後、信濃教育会に招かれ、信州各地で数多くの講演を行ない、多くの人々から崇拜されました。現在、長野県の上田、松本、豊科の3カ所に木村を慕う人たちが建てた記念碑があります。

12 大聖寺の機業家で錦城物産(株)の創業者（ ）は、羽二重や縮緬^{ちりめん}などの製織法を改良し、当時、綿布におされていた大聖寺絹の発展に貢献した。
①篠原藤平 ②山田長太 ③清水孝平 ④柿沢理平

正解は①です。（正解率 47.4%） 『学習帳産業人物編』 頁

大聖寺の機業家、篠原藤平は大聖寺仲町の絹問屋の長男で、明治 41 年、合資会社篠原商店、のちの錦城物産株式会社を創業。大正 7 年、南郷村に日本絹織株式会社の誘致に成功しました。羽二重や縮緬等の製織法を改良し大聖寺絹の発展を図りました。昭和 4 年、これらの業績により水守神社境内に紀功碑が建立されました。

13 塩屋浦の北前船主（ ）は、西栄寺の創建・再建に尽力し、また、大火の際、多くの井戸を掘ったり、飢饉のときは村民に米や粥を振る舞うなどして人々から敬まわれた。
①西野小左衛門 ②浜中八三郎 ③新後長三郎 ④亀谷万吉

正解は①です。（正解率 78.9%） 『学習帳産業人物編』 40 頁

塩屋は大聖寺川河口に位置し堀切湊として発展してきました。橋立や瀬越と同様、この塩屋からも、北前船主が出ましたが、特に西野家は江戸中頃から海運業をおこなっていたとされています。西野小左衛門は同町の西栄寺の建立に務めたり、天保の飢饉の際は、村民に粥を施すなどし、村民からは「西さま」と呼ばれていました。幕末から明治期にかけて、文人を逗留させ、支援するなど、文化的素養にも富んでいました。

14 瀬越の北前船主（ ）は、明治に入り、いち早く汽船を導入し、九州で鉱山経営もおこなうなどして事業を拡大し、大きな利益をあげた。
①大家七平 ②廣海二三郎 ③久保彦兵衛 ④西出孫左衛門

正解は②です。（正解率 68.4%） 『学習帳産業人物編』 43 頁

瀬越の 2 大船主といえば大家家と広海家ですが、特に、広海家は、明治初年に、和船のほとんどを洋帆船に切り替え、さらに明治 20 年には、北前船主としては最初に、蒸気船北陸丸を購入し、これ以降、汽船に重点を移し、事業を拡大させました。その後、海運業だけでなく、九州各地で鉱山経営にも乗り出し、日本を代表する北前船主となりました。

15 熊本市出身の（ ）は、起業家山田長太の知遇を得て大聖寺に在住し、昭和初年に、「絹業週報」、「聖域公論」等の新聞を発刊したり、『大聖寺藩史』などの郷土本を出版した。
①森本仁平 ②広田百豊 ③溝口秀勝 ④宮本謙吾

正解は④です。（正解率 47.4%） 『学習帳産業人物編』 48 頁

宮本謙吾は、熊本市の人でありながら、起業家山田長太の知遇を得て大聖寺に移り住みました。大聖寺在住中は、「絹業週

報」や「聖域公論」等の新聞を発刊したり、『大聖寺藩史』や『江沼文献叢書』『大聖寺絹業史』などの郷土本を出版するなど、郷土史家として活躍しました。晩年は郷里の熊本市に帰りました。

16 縄文時代早期の柴山水底貝塚からは、県内最古の人骨や関西の影響を受けた（ ）が多数出土している。

- ①加曾利式土器 ②星田式土器 ③大川式土器 ④北白川式土器

正解は④です。（正解率 78.9%） 『学習帳歴史編改訂版』9頁

柴山水底貝塚は、柴山洪積台地を背後に控えた柴山潟湖畔に位置し、無数の貝類のほか、土器片、人骨等が出土しました。土器は京都府の白川扇状地に展開する乙訓地域の遺跡から出土する縄文時代前期の標準土器（北白川式土器）の影響を受けており、このことから、この遺跡が縄文時代早期から前期にかけての貝塚であることが判明しました。

17 藤の木遺跡からは、県内最多の縄文時代中期の土器が発見。北陸特有の（ ）・上山田式土器・大杉谷式土器のほか、東海・近畿・関東系土器も有り、東西文化の接点であったことを示している。

- ①遠賀川式土器 ②長原式土器 ③古府式土器 ④田戸式土器

正解は③です。（正解率 63.2%） 『学習帳歴史編改訂版』9頁

藤の木遺跡からは金沢市古府縄文遺跡から出土した北陸特有の土器様式である古府式土器を初め、上山田式土器・大杉谷式土器に混じり、東海・近畿系土器や関東系土器等と、県内最多の縄文時代中期の土器が出土しました。また、石器では中京系の石斧や和田山産の黒曜石製の石刃もあり、この遺跡が東西文化の接点であったことを示しています。

18 上河崎地内から、弥生時代中期の（ ）が出土しており、大聖寺川流域でも稲作が行われていたことを物語っている。

- ①小松式土器 ②板付式土器 ③成川式土器 ④円乗院式土器

正解は①です。（正解率 42.1%） 『学習帳歴史編改訂版』10頁

上河崎地内から、北陸における弥生時代中期の小松式土器が確認されています。この小松式土器は小松市八日市地方遺跡から出土した弥生時代中期の標式土器で、この土器の出現により、この時代、稲作文化が浸透していたことが推察されています。

19 「北陸の登呂遺跡」とも称される猫橋遺跡からは多数の遺物とともに（ ）が確認されており、稲作文化の発展とともに、強力な指導者が出現し階級社会への方向へ進んでいたことを示している。

- ①高床式住居 ②大型竪穴式住居 ③銅鏡 ④方形周溝墓

正解は④です。（正解率 47.4%） 『学習帳歴史編改訂版』10頁

方形周溝墓は、幅 1~2m、深さ 1m 前後の溝を埋葬部分の周囲に方形にめぐらした墓のことです。弥生時代から古墳時代前半期に営まれた墓制で、弥生時代前期に近畿地方に出現し、中期以降各地に拡がりました。現在の研究では被葬者の性格や古墳との関連性は不明ですが、共同体内部の有力世帯の墓から族長層の単独葬へ変遷したと考えられています。

20 富塚丸山古墳は、狐山古墳に続く豪族の墳墓と推定され、現在は直系 70m 近くの規模だが、もし前方後円墳ならば、全長（ ）以上で、手取川以南のこの時期では最大級の古墳といわれ、南加賀全体に君臨した権力者の墓だった可能性がある。

- ① 80m ② 120m ③ 160m ④ 200m

正解は②です。(正解率 42.1%) 『学習帳歴史編改訂版』12 頁

富塚丸山古墳は、現在周囲を削られて直径70m規模となっていますが、江戸時代に甲冑や刀剣・勾玉等の副葬品が出土したと伝えられており、前方後円墳であった可能性があります。この場合は、全長120m以上の大きさとなり、手取川以南のこの時期では最大の古墳となり、南加賀全体に君臨した権力者の墓だった可能性があります

21 寛治5年(1091)、加賀守()が加賀国府から帰京に際し、淡津泊を中継点として敦賀津まで向かったと日記に記録していることから、当時の貴族層は京都と加賀国の往来に船運を利用していたのが分かる。
①藤原家通 ②高階為章 ③源雅兼 ④藤原為房

正解は④です。(正解率 78.9%) 『学習帳歴史編改訂版』15 頁

寛治4年(1090)6月5日、藤原家通の替わりに、加賀守に就任した防鴨河使左少弁藤原為房の日記『為房卿記』によれば、翌5年6月15日に任国に赴き、国事行為を行った後、7月19日に乗船し淡津泊を経て20日に敦賀津に着き、23日に帰洛したことが記されています。

22 元弘3年(1333)、後醍醐天皇の倒幕運動に足利高氏が加担すると、加賀国福田荘菅浪郷惣領地頭兼菅生社神主()が能美郡国人2人と共に足利高氏に参陣した。
①建部頼春 ②八幡尚成 ③狩野頼広 ④狩野忠家

正解は③です。(正解率 73.7%) 『学習帳歴史編改訂版』19 頁

後醍醐天皇の倒幕運動に同調した足利高氏は鎌倉幕府を離反しました。これに同調して、京の六波羅探題の滅亡や越中守護所の放生津館の炎上を機に、狩野頼広(加賀国福田荘菅浪郷惣領地頭兼菅生社神主)が、同国府南社御供田地頭の建部頼春や同国八幡一分地頭八幡尚成と共に足利高氏に参陣し、新政府に属する態度を明確にしました。

23 中世加賀国の北野天満宮領は7ヶ所、うち江沼郡は福田荘・山代荘本郷・富墓荘の3ヶ所と集中していた。そのうち富墓荘は、室町時代中期には宮寺領頃は名目だけで、地元の武士に侵害され、わずかに菅原道真の後裔の()が権益の一部を保有するのとなっていた。
①大江家 ②菅原家 ③高辻家 ④徳大寺家

正解は③です。(正解率 52.6%) 『学習帳歴史編改訂版』21 頁

富墓荘の伝領関係については、高辻家の領有権が先行し、後に北野宮寺領に繰り入れられたものか、或いは北野宮寺領として成立し、後に高辻家が荘務職を入手したものかは不明です。ただし、北野松梅院の権利は、現実に荘務を支配するのではなく、荘務を知行する高辻家から社納分100石の送付を受けるものであったに過ぎないと考えられます。

24 15世紀以降、京都の公家の中には荘園領主の権益を守るために下国し、家領の直接経営に当たる者も多かった。山代荘忌浪郷では領家の()流の園基富・基国父子が30年間にわたり在住して直務を行ったようである。
①藤原北家 ②藤原南家 ③村上源氏 ④桓武平氏

正解は①です。(正解率 36.8%) 『学習帳歴史編改訂版』21 頁

園家は、藤原北家道長の次男右大臣頼宗の子孫で、鎌倉時代持明院基家の3男参議基氏が創設しました。山代荘は、12世紀末に加賀の知行国主として公領を知行していた持明院基家の支配下に、相次いで加賀守となった基家の子の基宗・保家兄弟によって立荘され、兄弟の弟である基氏の手に移ったと考えられます。

25 延徳3年(1491)、室町幕府の前管領()・歌人冷泉為広等が、京から越後への往復に加賀を通過しているが、その行程が『為広越後下向日記』に詳細に記録されており、その内容から当時の北陸道の幹道が分かる。
①細川政元 ②畠山政長 ③斯波義廉 ④細川勝元

正解は①です。(正解率 26.3%) 『学習帳歴史編改訂版』23頁

延徳3年(1491)3月、室町幕府の前管領細川政元は、歌人冷泉為広等と共に越後への下向の途中、越前から加賀を経て、4月越後から帰京のため、越中から加賀に入りました。それらの行程は冷泉為広の『為広越後下向日記』に詳細に記録されています。

26 享禄の錯乱で、超勝寺一党に攻め込まれた山田光教寺では2世住持()を中心に、黒瀬覚道・福田ノ竹太夫・柴山・一針らの有力国人等が越前の朝倉氏の援軍を得て戦ったが敗れ、越前に亡命した。
①顕誓 ②蓮能 ③実玄 ④蓮淳

正解は①です。(正解率 73.7%) 『学習帳歴史編改訂版』25頁

本願寺10世証如の時代になると、門徒は直接本願寺の直参門徒になる志望を強めていきました。そうした門徒の動向を察した本願寺は、越前帰還を望み三ヶ寺と対抗関係にあった超勝寺との連携を深め、反三ヶ寺体制の姿勢を示すようになりました。これに対し三ヶ寺派は実力行動で超勝寺を討つことを決意しましたが、超勝寺一党が攻撃に出て松岡寺を滅ぼし、本泉寺を焼き払い、江沼郡にも攻め込みました。この「享禄の錯乱」により、「加州三ヶ寺体制」は消滅し、名実ともに本願寺直参を中心とする本願寺王国が出現しました。

27 蓮如は、浄土真宗本願寺第7代法主存如の長庶子として出生。永禄3年(1431)天台衆の()において得度した。長禄元年(1457)本願寺第8世を継ぎ、布教活動で本願寺の教線を大きく拡大させた。
①三千院 ②滋賀院 ③曼殊院 ④青蓮院

正解は④です。(正解率 31.6%) 『学習帳産業人物歴編』51頁

蓮如が誕生した頃の本願寺は、真宗諸派の中でも教線が最も衰退していた時代で、本願寺は天台宗の門跡寺院青蓮院の末寺となっている状態でした。そのため、蓮如も中納言広橋兼郷の猶子となって青蓮院で得度し、中納言兼寿と名乗りました。

28 大聖寺藩3代藩主前田利直は、2代藩主利明の3男で、元禄5年(1692)大聖寺藩を家督相続。宝永6年(1709)に藩邸北隅の大聖寺川に面して長流亭を建造したが、幕府の()として江戸城に登城しなければならず、ほとんど江戸に住んだ。
①奥詰 ②側用人 ③若年寄 ④老中

正解は①です。(正解率 78.9%) 『学習帳産業人物編』46頁

奥詰は、5代将軍綱吉の時代と幕末のみ設置された幕府の職制です。両者は職務内容が全く異なり、前者は元禄2年(1689)3月～宝永6年(1709)正月まで設けられ、譜代大名・外様大名の中から10名を任命し、隔日交代で登城し、江戸城山水之間に詰め、将軍の諮問に応えました。利直は家督相続前の元禄4年に奥詰に任命されており、将軍綱吉から厚く信頼されていました。

29 建武2年(1335)、鎌倉幕府の再興を図って中先代の乱が起こると、この反乱に北陸道で呼応した名越時兼の軍勢が上洛を目指して南下したが、大聖寺城に立て籠もる敷地伊豆守・()・上木平九郎等の狩野一党と応援に赴いた越前の軍勢により殲滅されたという。
①狩野義兼 ②福田甚左衛門 ③山岸新左衛門 ④犬沢八兵衛

正解は③です。(正解率 47.4%) 『学習帳歴史編改訂版』20 頁

鎌倉幕府の崩壊によって成立した建武政権は、全国の領主や民衆の期待に応える政権でなかったため、各地で建武政権に対する反乱が occurred。その最大の反乱が、建武2年(1335)7月、北条高時の子時行を擁立した中先代の乱でした。これに呼応した越中の前守護名越時有の子時兼が越中・加賀・能登の軍勢を集め、上洛しようと南下した際、「大聖寺ノ城」に立て籠もる狩野一党が、越前からの援軍を得て時兼軍を阻止し、これを殲滅させました。

- 30 永楽和全は京都の陶工で、慶応元年(1865)には大聖寺藩の要請を受けて来藩していたと考えられ、九谷本窯や()で窯業技術の指導を行う傍ら、精力的に陶製を行い、停滞していた九谷焼に新しい息吹を与えた。
- ①民山窯 ②春日山窯 ③蓮台寺窯 ④小野窯

正解は②です。(正解率 47.4%) 『学習帳産業人物編』26 頁

永楽和全と大聖寺藩の関わりは万延元年(1860)に藩命で木崎万亀が京都で和全に師事したことに始まります。帰郷した万亀は山代の木崎窯を春日山(春日山窯)に移しましたが、藩は領内の産業の一つである九谷焼の再興を図り、宮本屋窯を買収して九谷本窯と称しました。しかしながら、技術面で行き詰まったため、指導者として万亀の師である永楽和全を招くこととなりました。

- 31 豊臣秀吉の家臣となった山口玄蕃宗永は、千利休に茶の湯を学び、()の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などとともに茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人であった。
- ①京都 ②大坂 ③博多 ④堺

正解は③です。(正解率 15.8%) 『学習帳歴史編改訂版』30 頁

筑前・筑後(福岡県)の領主小早川秀秋は、慶長3年(1598)4月に豊臣秀吉の命により越前北庄城主に移されました。このとき、秀秋の筆頭家老山口玄蕃宗永は、秀吉の直臣に転じて大聖寺城主となり、江沼郡7万石を支配しました。宗永は山城国(京都府)の出身で、理財の道に優れ、また千利休に茶の湯を学び、博多の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などと茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人でした。

- 32 金沢城主前田利長は、慶長5年(1600)8月3日に大聖寺城主の山口玄蕃宗永親子を攻め滅ぼした。この大聖寺合戦で山口軍は、およそ()人の家臣が討ち死にした。
- ①500 ②600 ③700 ④800

正解は④です。(正解率 78.9%) 『学習帳歴史編改訂版』31 頁

金沢城主前田利長は、慶長5年(1600)8月3日に大聖寺城主の山口玄蕃宗永親子を攻め滅ぼしました。この大聖寺合戦で1200人の山口軍は、およそ800人の家臣が討ち死にしました。山口玄蕃宗永の首塚は大聖寺新町の福田橋詰にあり、現在も宗永親子が自決した8月3日に法要が行われています。全昌寺の境内には松江市(島根県)在住の山口氏の末裔が明治23年(1890)に建てた石碑があります。

- 33 大聖寺藩祖前田利治は、承応2年(1653)に藩財政が不足したため、筆頭家老の玉井市正貞直をはじめ、家臣()を加賀藩へ返還した。
- ①20人 ②22人 ③24人 ④26人

正解は③です。(正解率 78.9%) 『学習帳歴史編改訂版』33 頁

大聖寺藩祖前田利治は、寛永16年(1639)に玉井市正・織田左近・神谷治部・山崎庄兵衛ら7人の家老をはじめ、家臣106人を従えて入部しました。このとき、家臣の総禄高は7万石中の4万5000石を占めて藩財政が不足したため、藩祖前田利治は承応2年(1653)に筆頭家老の玉井市正貞直をはじめ、家臣24人を加賀藩へ返還しました。

34 大聖寺藩祖前田利治は、万治3年（1660）4月21日に江戸で死去した。これに伴い、中沢久兵衛、小沢三郎兵衛、小栗権三郎の3人が殉死（追腹）したが、このうち小栗は5月2日に（ ）で自害した。
 ①宗英寺 ②久法寺 ③全昌寺 ④寛慶寺

正解は②です。（正解率 68.4%） 『学習帳歴史編改訂版』33頁

大聖寺藩祖前田利治は、万治3年（1660）4月21日に江戸で死去しました。このとき、中沢久兵衛（35歳）、小沢三郎兵衛（49歳）、小栗権三郎（22歳）の3人が殉死（追腹）しました。小沢は4月27日に信州（長野県）善光寺に隣接する寛慶寺で、中沢は5月3日に全昌寺で、小栗は5月2日に久法寺でそれぞれ自害しました。彼らの墓は、いまでも実性院にある藩祖利治の墓の後方に建てられています。

35 大聖寺藩では、加賀藩の御用絵師を務めた佐々木泉景をはじめ、小原文英・山口梅園・小島春晁などの絵師が活躍した。小原文英は狩野派を学んだのち、谷文晁から（ ）を修得した。
 ①南画 ②写生画 ③文人画 ④洋画

正解は③です。（正解率 84.2%） 『学習帳歴史編改訂版』47頁

大聖寺藩の絵師では、加賀藩の御用絵師を務めた佐々木泉景をはじめ、小原文英・山口梅園・東方蒙斎・小島春晁などが活躍しました。佐々木泉景は享和元年（1801）に禁裏御用を務め、翌年に法橋位に叙せられ、文化4年（1807）から加賀藩御用を務めました。小原文英は初め狩野派、のち谷文晁から文人画を修得しました。山口梅園は小原文英に南画を学び、のち京都の浦上春琴や山本梅逸に師事しました。

36 大聖寺藩の十村には、組付十村と目付十村の2種があった。小塩辻村の鹿野小四郎、右村の堀野新四郎、保賀村の荒森宗左衛門、（ ）の和田半助などは代々十村役を務めた。
 ①分校村 ②動橋村 ③弓波村 ④日末村

正解は①です。（正解率 36.8%） 『学習帳歴史編改訂版』36頁

大聖寺藩の十村（大庄屋）には、十村組を有する組付十村と、それを監視する目付十村（手振十村）の2種がありました。小塩辻村の鹿野小四郎、右村の堀野新四郎、保賀村の荒森宗左衛門、分校村の和田半助、動橋村の橋本源左衛門、島村の和田五郎左衛門、日末村の間兵衛などは代々十村役を務めました。組付十村には役料として鋤役米が、目付十村には御切米が支給されました。鋤役米は15～60歳の男子から米2升を徴収したものです。

37 大聖寺藩では、荏油や菜種油とともに桐油や^{たぶ}楡油が多く生産された。油桐や^{たぶ}楡は（ ）村をはじめ、領内の村々でも栽培されるようになりました。
 ①勅使 ②日谷 ③庄 ④分校

正解は②です。（正解率68.4%） 『学習帳歴史編改訂版』45頁

油桐や楡は三谷の曾宇・直下・日谷村をはじめ、領内の村々でも栽培されるようになりました。特に、桐油は江戸末期に「大聖寺桐油」と称し、他領にも知られる産物となりました。なお、石川県の桐油生産量は、大正3年（1914）に全国第4位で、その8割を三谷村と三木村が占めていました。

38 大聖寺藩9代前田利之は、文政4年（1821）12月に加賀藩主12代（ ）の願書により江戸幕府から10万石の待遇が公認された。
 ①前田重教 ②前田治脩 ③前田齊泰 ④前田齊広

正解は④です。（正解率 73.7%） 『学習帳歴史編改訂版』 39 頁

大聖寺藩 9 代前田利之は、文政 4 年（1821）12 月に加賀藩主 12 代前田斉広の願書により江戸幕府から 10 万石の待遇が公認されました。10 万石の内訳は本高 7 万石・新田高 1 万石に、毎年、加賀藩から支給される米 2 万俵を加えたものでした。しかし、幕府の朱印状は 8 万石で、加賀藩の支給米も毎年、金 300 両に過ぎませんでした。9 代利之はまさに名を得て実を捨て、諸藩とは逆に実高よりも表高が多い便宜的な高直し行いました。

39 大聖寺藩では、天保元年（1830）頃まで伊切・浜佐美・篠原新の 3 か村で「塩手米制」という専売制により塩を製造した。塩釜数は 3 か村の中で伊切村が最も多く、江戸後期に（ ）あった。
①13 個 ②15 個 ③17 個 ④19 個

正解は③です。（正解率 47.4%） 『学習帳歴史編改訂版』 44 頁

大聖寺藩では、天保元年（1830）頃まで伊切・浜佐美・篠原新の 3 か村で「塩手米制」という専売制により塩を製造していました。これ以前、江戸中期までは片野・中浜・小塩・塩浜・塩屋村などでも製塩が行われていました。塩手米制は北前船主が瀬戸内海産の安い塩を「土産塩」と称して移入し、領内産の塩が売れなくなったため、天保元年（1830）頃に「塩役制」に移行しました。

40 大聖寺藩の史学・地誌では、『芟憩紀聞』『藩国見聞録』『加賀江沼志稿』『秘要雑集』など多くの著書が編纂された。このうち『藩国見聞録』は、弘化 2 年（1845）に（ ）が著述した。
①塚谷沢右衛門 ②宮永嘉告 ③小塚秀得 ④奥村永世

正解は④です。（正解率 57.9%） 『学習帳歴史編改訂版』 46 頁

大聖寺藩の史学・地誌では、『芟憩紀聞』『藩国見聞録』『加賀江沼志稿』はじめ、『秘要雑集』『江沼郡雑記』など多くの著書が編纂されました。『芟憩紀聞』（領内の名所旧跡、神社仏閣記）は享和 3 年（1803）に塚谷沢右衛門が、『加賀江沼志稿』（領内の総合地誌）は弘化元年（1844）に小塚秀得が、『藩国見聞録』（領内の地誌、神社仏閣記）は同 2 年（1845）に奥村永世が著述しました。

41 柴山瀉では大聖寺川と同様に川舟が往来し、その周囲には河道（舟着場）が設置されていた。遊行上人一行は、江戸期に（ ）領にあった「上人河道」を利用して実盛塚を回向した。
①柴山村 ②篠原村 ③新保村 ④伊切村

正解は④です。（正解率 84.2%） 『学習帳歴史編改訂版』 37 頁

遊行上人一行 100 人余は、前年の 10 月下旬に金沢玉泉寺に入り、そこで翌年 2 月まで約 100 日間逗留したのち、金沢を出立して小松で宿泊しました。上人一行は翌日午前中に小松の多太八幡宮を参詣し、午後には篠原の実盛塚に移動して弥陀經の念仏を唱えました。このとき、上人一行は今江村から数艘の舟に乗り、大聖寺藩士が待つ伊切村領の上人河道で舟を降りました。

42 伊能忠敬ら測量隊（ ）は、享和 3 年（1803）6 月 24 日から 27 日まで大聖寺藩領の沿岸を測量し、大聖寺町の板屋や松屋、片野村の肝煎宅、橋立村の因随寺などに宿泊した。
①6 人 ②7 人 ③8 人 ④9 人

正解は③です。(正解率 36.8%) 『学習帳歴史編改訂版』39 頁

伊能忠敬は享和3年(1803)2月25日に江戸を出立し、東海・北陸・佐渡を測量して、10月7日に江戸へ帰着するという第4次測量を行いました。忠敬ら測量隊8人は、同年6月24日に吉崎(本願寺かけ所泊)から大聖寺町に入り、同日に本町の板屋泊と松屋泊、25日に片野村の肝煎泊、26日に橋立村の因随寺(現福井別院橋立支院)泊をもって大聖寺藩領の海岸部を測量しました。

43 大聖寺西端の錦城山には、南北朝時代から元和元年(1615)まで数度に亘って大聖寺城が設置された。安土桃山時代には、()の陪臣にあたる山口玄蕃宗永も大聖寺城の改修を行った。

- ①織田信長 ②豊臣秀吉 ③柴田勝家 ④丹羽長秀

正解は②です。(正解率 31.6%) 『学習帳歴史編改訂版』30 頁 『学習帳自然民俗文化財編改訂版』54 頁

大聖寺西端の錦城山には、南北朝時代から元和元年(1615)まで数度に亘って大聖寺城(津葉城を含む)が設置されてきました。大聖寺城が歴史に登場するのは、南北朝時代の『太平記』が初見です。その後、一向一揆勢の土豪、織田信長の家臣、羽柴秀吉の陪臣溝口秀勝、小早川秀秋の筆頭家老山口宗永、加賀藩主2代前田利長の家臣(大聖寺城代)などの武将が統治しました。大聖寺城跡は、織豊時代の城郭を知る貴重なものとなっています。

44 大聖寺下屋敷から神明町までの一帯は、「山の下寺院群」と呼ばれ、実性院・蓮光寺・久法寺・全昌寺・正覚寺・宗寿寺・本光寺の7寺院と神明宮の1神社がある。宗寿寺は()の寺院である。 ①浄土宗 ②曹洞宗 ③日蓮宗 ④法華宗

正解は③です。(正解率 36.8%) 『学習帳歴史編改訂版』35 頁

大聖寺下屋敷から神明町までの一帯は、「山の下寺院群」と呼ばれ、実性院(曹洞宗)・蓮光寺(日蓮宗)・久法寺(法華宗)・全昌寺(曹洞宗)・正覚寺(浄土宗)・宗寿寺(日蓮宗)・本光寺(法華宗)の7寺院と神明宮の1神社が並んでいます。これは藩政初期に大聖寺藩が越前との国境付近に、意図的に寺社を集めたものといわれています。

45 大聖寺藩では、武士の鍛錬のために片野鴨池の周辺で鴨や雁などを捕る坂網猟が武士のみで行われた。そのため、江戸後期には、坂網を投げ上げる「坂場」が()か所余もあった。 ①630 ②650 ③670 ④690

正解は③です。(正解率 47.4%) 『学習帳歴史編改訂版』45 頁

大聖寺藩には、江戸後期に坂網猟の坂網を投げ上げる「坂場」が670か所余もありました。坂網猟は元禄年間(1688~1704)に大聖寺藩士村田源右衛門によって始められたと伝えられ、武士の鍛錬のために武士のみで行われました。現在、これは毎年、11月15日から2月15日までの3か月間、片野鴨池周辺の坂場で行われています。坂場は毎年、くじ引きをして決めています。

46 江沼神社の境内端にある長流亭(川端御亭)は、宝永6年(1709)に3代前田利直の休憩所として家老()によって建造されたといわれている。この建物は柿葺の平屋で、小堀遠州の建築意匠を採り入れている。

- ①村井主殿 ②山崎権丞 ③神谷内膳 ④佐分儀兵衛

正解は①です。(正解率 57.9%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』40 頁

家老の村井主殿は、宝永6年(1709)に大聖寺藩3代前田利直の意を受けて、小堀遠州作成の茶席図をもとに川端御亭(現

長流亭)を建造したといわれています。侘びと雅が融合した大胆な意匠と細部にまで入念に施された装飾は、江戸期の加賀・大聖寺両藩の文化水準と工芸技術の高さを今に伝えるものとして、高い評価を得ています。

47 加賀藩主3代前田利常夫人は、元和5年(1619)に敷地天神社に御神宝の蒔絵角赤手箱と御神楽代を寄進した。利常夫人は2代将軍徳川秀忠の()珠姫のことで、法号を天徳院と称した。 ①長女 ②二女 ③三女 ④四女

正解は②です。(正解率 68.4%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』41頁

加賀藩主3代前田利常の夫人は、元和5年(1619)に敷地天神社に御神宝の蒔絵角赤手箱と御神楽代を寄進しました。利常の夫人は2代将軍徳川秀忠の2女珠姫で、法号を天徳院と称しました。手箱は珠姫が婚礼の際に持参した婚礼調度品の一つ、化粧道具や身の回りの品々を納めたものであり、現在は国指定文化財として東京国立博物館に保管されています。

48 菅生石部神社の境内入り口には、三間一戸の定型的な楼門(神門)がある。これは文政8年(1825)に()の名工山上善右衛門嘉広の系統にあたる7代目善右衛門吉順が設計したものである。 ①四天王寺流 ②遠州流 ③大都流 ④建仁寺流

正解は④です。(正解率 57.9%) 『学習帳自然・民俗・文化財編改訂版』59頁

菅生石部神社の境内入り口には、三間一戸の定型的な楼門(神門)があります。これは文政8年(1825)に建仁寺流の名工山上善右衛門嘉広の系統にあたる7代目善右衛門吉順が設計したものであり、大聖寺藩主をはじめ有力町人らの寄進により、大聖寺・加賀両藩の大工棟梁を動員して建立されました。屋根はもと棧瓦葺きでしたが、昭和5年の修理で銅板葺きとなりました。

49 明治元年2月、大聖寺藩は官軍から弾薬・雷管()発の調達を命じられ、その資金不足を補うために錦城山の麓で贋金造りをした。 ①5万 ②10万 ③20万 ④30万

正解は③です。(正解率 68.4%) 『学習帳歴史編改訂版』50頁

明治元年(1868)2月、大聖寺藩は官軍から弾薬(パトロン)と雷管(発火具)20万発の調達をもとめられました。その資金不足を補うために一分銀や銀の簪などを京都や大阪で買い集めて、錦城山の麓下の洞穴で二分金を偽造しました。

50 明治4年に起きた「みの虫一揆」において、農民たちは大聖寺藩に七か条の要求書をつきつけた。その主なる内容は、増税の見直しと()の廃止であった。 ①税務官設置 ②定免法 ③藩知事制 ④十村役

正解は④です。(正解率 68.4%) 『学習帳歴史編改訂版』51頁

明治4年(1871)11月、大聖寺県内で農民一揆が起きました。農民たちは敷地村の端で青池大参事らに七か条の要求をつきつけました。その主なる内容は、大聖寺藩が赤字財政を補填するためにとった増税策に対する見直しや十村役の廃止などでした。

51 明治天皇の北陸巡幸は、明治11年8月30日に、総勢798人という空前の人数を従え東京を出発した。その後、富山、金沢を経て、大聖寺町に到着したのは()6日のことであった。 ①9月 ②10月 ③11月 ④12月

正解は②です。（正解率 36.8%） 『学習帳歴史編改訂版』 52 頁

明治天皇の巡幸は右大臣岩倉具視や参議大隈重信らを従え、総勢 798 人という空前の人数でした。行列は、8 月 30 日に東京を出発し、富山県（当時は石川県）に入ったのは 9 月 28 日でした。一行は金沢にしばらく滞在し、10 月 6 日には、小松の串茶屋村から動橋村に入り、その日の午後到大聖寺町に到着しました。

52 明治期、大聖寺の大沢十次郎や（ ）の屋号をもつ井上商店は、山中漆器や九谷焼を海外に輸出するなどなどして郷土の地場産業振興に力を注いだ。
①陶源 ②吉田屋 ③大陶 ④角福

正解は①です。（正解率 42.1%） 『学習帳歴史編改訂版』 53 頁

大聖寺の井上商店（屋号「陶源」）も山中漆器 や九谷焼を海外に輸出する貿易商として活躍していました。とくに、海外の需要に基づき江戸時代の中頃の染 錦伊万里の写しを大量に生産しました。これらの焼物は、仕上がりが大変 良く、「大聖寺伊万里」と呼ばれて、江沼郡における九谷焼業 界の隆盛を築くもととなりました。

53 初代新家熊吉は、明治 32 年、漆器の販路開拓のために海外に渡航したが、旅先の（ ）で自転車を見て、木製リムの製造を思い立ったとされている。
①アメリカ ②ロンドン ③ロシア ④フランス

正解は③です。（正解率 52.6%） 『学習帳歴史編改訂版』 54 頁

山中村で漆器木地を挽く職人の家に生まれた新家熊吉は、16 歳の時、家業を継ぎ、明治 32 年には漆器を輸出するために中国やロシアなどに出かけました。ロシアのウラジオストックで見た自転車に強い関心を持ち、漆器製造の技術を利用して自転車の木製リムの製造を思いつきました。

54 大聖寺博覧会は明治 12 年に、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校を会場に開催されたが、この事業は旧大聖寺藩の家老であった（ ）や権大参事の飛鳥井清が中心となって企画したものである。
①佐分儀兵衛 ②生駒一彦 ③稻垣 譲 ④前田 幹

正解は④です。（正解率 63.2%） 『学習帳歴史編改訂版』 54 頁

大聖寺博覧会は、明治 12 年の 4 月から 5 月にかけて、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の 2 ヶ所を会場に盛大に開催されました。この博覧会は、旧大聖寺藩の家老 前田幹や権大参事飛鳥井清らが企画したもので、江沼郡における初の博覧会の開催でした。

55 片山津温泉の開湯は、明治 15 年に（ ）郡の観音堂村から招いた井戸掘りの森仁平が源泉掘削に成功したことに始まる。
①羽咋 ②鹿島 ③石川 ④河北

正解は③です。（正解率 21.1%） 『学習帳歴史編改訂版』 56 頁

明治 15 年（1882）6 月 28 日 には、石川郡観音堂村から井戸掘りの森仁平を招き、特殊な工法で掘削し、湯量を確保することに成功しました。のちに、片山津温泉では、この日を開湯記念日として「湯の祭り」 が始められるきっかけとなりました。

56 政府はGHQの指令に基づき、昭和22年に農地改革を実施した。これにより江沼郡でも、小作地が23.2%あったものが、約()%に減少した。
① 6 ② 8 ③ 10 ④ 12

正解は②です。(正解率47.4%) 『学習帳歴史編改訂版』62頁

農地改革により、石川県では1万299町歩の農地が地主から買収されました。この面積は、小作地総面積75.4%に当たりました。江沼郡でも1081町歩の農地が、延べ5710戸の地主から買収され、その結果、小作地は23.2%から8%に減少しました。

57 加賀棒茶の製造で広く知られる動橋町の「株丸八製茶場」の社名は、丸谷家の初代()の名に由来している。
① 八兵衛 ② 八左衛門 ③ 惣八 ④ 八衛門

正解は②です。(正解率15.8%) 『学習帳産業人物編』8頁

動橋町で加賀棒茶の製造を手掛けている「株丸八製茶場」は、文久3年(1863)、藩の製茶奨励政策によってつくられた打越茶園を起源とする歴史を有し、その社名は初代の丸谷八左衛門の名に由来しています。

58 現在の加賀九谷陶磁器協同組合は、明治15年、()を会長として発足した江沼郡九谷陶画同盟会が前身となっている。
① 浅井一毫 ② 飛鳥井清 ③ 東方芝山 ④ 竹内吟秋

正解は②です。(正解率63.2%) 『学習帳産業人物編』14頁

現在の「加賀九谷陶磁器協同組合」は、明治15年(1882)に旧大聖寺藩士飛鳥井清を会長として発足した「江沼郡九谷陶画工同盟会」が前身となっています。その後、「山代九谷振興会」や「大聖寺陶芸研究会」に分かれ、昭和33年、加賀市発足に伴い、これらは合体して「加賀市九谷焼陶磁器振興会」となりました。

59 江沼郡では、明治13年頃までにおよそ40の小学校が設立された。これにより、その就学率も明治6年は()%であったものが、明治10年には40%に上昇した。
① 8 ② 18 ③ 21 ④ 28

正解は④です。(正解率5.3%) 『学習帳歴史編改訂版』59頁

明治期における日本全体の就学率を見ると、明治6年で28.1%、明治10年で39.9%となっており、江沼郡もほぼ全国平均の数値となっています。但し、男女比で見ると、女子の就学率は男子のいずれも半分以下でした。

60 現在の加賀商工会議所の歴史は、昭和22年、新家熊吉が会頭となって発足した()が起源となっている。
① 江沼商工会議所 ② 大聖寺商工会議所 ③ 江沼商工会 ④ 加賀商工会

正解は①です。(正解率31.6%) 『学習帳産業人物編』18頁

現在の「加賀商工会議所」は、戦後まもなく設立された「江沼商工会議所」に始まります。初代会頭には新家熊吉が選任されています。しかし、3年後の昭和25年にはこれを廃止し、「大聖寺商工会」を中心とした各町村単位の商工会に移行しました。昭和33年の加賀市発足後も「加賀市商工会連合会」「加賀市商工会」などの変遷があり、昭和44年4月1日に「加賀商工会議所」が正式に設立され、今日に至っています。